

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 2 年 7 月 6 日現在

機関番号：43502

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2019

課題番号：17K03651

研究課題名（和文）金融主導型レジームにおけるネオ・リベラリズム政策の研究

研究課題名（英文）A research on Neoliberal policy in the finance-led regime

研究代表者

内藤 敦之（Naito, Atsushi）

大月短期大学・経済科・教授

研究者番号：40461868

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、金融主導型レジーム、すなわち、金融化が進展し、金融の役割が増大しているマクロ経済レジームにおけるネオ・リベラリズム政策を主題としている。成果としては、第一に、金融主導型レジーム及びその基礎となる金融化について検討を行い、第二に、ネオ・リベラリズム政策に関しては、ネオ・リベラリズムとは何かという点をフーコーの分析を参考に考察している。第三に、ネオ・リベラリズム政策への批判としての反緊縮政策の理論的基礎として表券主義の貨幣理論の検討を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、金融化、すなわち、金融的な現象が経済及び社会において重要度を増していく傾向が主導的なマクロ経済システムがどのようなものであるかを明らかにした上で、いわゆるネオ・リベラリズム的政策がそういったレジームとどのような関係にあるのかを明確にする目的で行われている。また、ネオ・リベラリズム政策とは何かという点をフーコーの議論を参照することによって、ネオ・リベラリズムに関して拡散している議論をまとめ直すという意図に沿って考察している。

研究成果の概要（英文）：In this study, we investigate the subject on neoliberal policy in finance-led regime, which is a macroeconomic regime that financialization develops and the role of finance enhances. The result of this study is, firstly, that we examine the finance-led regime and the financialization as its basis. Secondly, we contemplate the nature of neoliberalism as to the neoliberal policy with reference to Michel Foucault's analysis. Thirdly, we examine the theory of money in Chartalism as the theoretical ground for anti-austerity policy, which is a criticism for neoliberal policy.

研究分野：経済理論

キーワード：金融化 金融主導型レジーム ネオ・リベラリズム ネオ・リベラリズム的政策 フーコー 緊縮政策
ポスト・ケインジアン

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

金融化現象とインフレーション目標政策を中心とする近年の金融政策論との関係は既に検討し、一定の関係が存在することは確認されたが、そういった金融政策は、いわゆるネオ・リベラリズム政策とも呼ばれる最近の経済政策の一部である。A *Brief History of Neoliberalism* (Harvey, 2005)に代表されるネオ・リベラリズム論は経済政策を中心に政治・経済を分析する枠組として、一定の成功を収めているけれども、金融化あるいは金融的な面との関係においては、その位置付けは必ずしも明確ではない。また、政策及びその背景となる思想に焦点を当てているため、経済レジーム、あるいはマクロ的な経済連関との関わりもそれほど充分には分析されていない。経済政策はその思想的背景も重要ではあるが、あるレジームにおいて、そのレジームの一環を成すとともに、マクロ経済連関とその成果に影響を与える。そのため、ネオ・リベラリズム政策が近年の経済レジームにおいてどのような位置を占めるのかを検討する必要がある。具体的には、インフレーション目標政策に代表される金融政策と、緊縮的な財政政策及び、様々な規制緩和政策が、現在の金融主導型、あるいは認知資本主義レジームにおいてどのような意味を持ち、また、どのような結果をもたらしているのかを分析する。また、金融化あるいは金融的な面とネオ・リベラリズム政策がどのように関係しているのかをマクロ・レジームとの関連であらためて検討する。

関連する研究としては、第一に、ポスト・ケインジアン的な金融化論においては、金融主導型のレジームとして捉えられており、金融化がマクロ経済に果たす影響と役割が分析され、さらにレギュレーション理論的なレジーム論においては、マクロ経済の連関として定式化が行われている。政策に関してはある程度分析が行われているが、ネオ・リベラリズム論的なポリシー・ミックスの位置付けは不十分である。ただし、緊縮政策に関する批判的検討は存在する。

第二に、ポスト・ケインジアンの内生的貨幣供給論やミンスキーに影響を受けた金融的アプローチにおいては、その理論と整合的な政策、特に金融政策と金融の規制、緊縮的ではない財政政策に関して議論が行われている。内生的貨幣供給論に関しては現状の分析よりも理論としての構築が優先されるため、実際の政策の分析よりも、望ましい政策に関する議論が中心となっている。また、ミンスキーの金融不安定性論やその影響を受けた金融化論においては金融政策の検討が中心であり、具体的には金融不安定性や金融化を促進させた政策、すなわち、金融の規制緩和に関して、不安定性を解消し、金融危機を防ぐための規制についての議論が大半を占めている。他方、財政政策に関しては、ポスト・ケインジアンにおいても重視はされている。現状の分析としては緊縮政策に関する議論はある程度成されているが、他の政策との関係などは必ずしも十分には検討されていない。

第三に、ネオ・リベラリズム論においては、レジーム論的な分析も存在するが、そもそも、政策及び背景の思想への関心が出発点となっているため、現代の経済レジームにおける位置付け、及び金融(化)との関係についてはそれほど明確ではない。

2. 研究の目的

本研究は金融化現象とネオ・リベラリズム政策の関係の理論的、経済思想的検討を目的とする。金融化は、経済及び社会において、金融が重要度を増している現象を示しており、例えば、2008年の世界的な金融危機の主要な要因となっている。他方、近年の経済政策はネオ・リベラリズム政策として捉えられることが多く、ネオ・リベラリズム論として展開されているが、必ずしも、レジーム論的なマクロ経済の連関を踏まえたものとはなっていない。この研究では、金融化論及び、それに基づいた金融主導型のレジーム論において、ネオ・リベラリズム政策がどのように位置付けられるかを、ネオ・リベラリズム論の成果を参照しつつ検討し、また、これまでネオ・リベラリズム論で行われてきた政策の思想的背景に関して、レジームとの関係で考察する。

3. 研究の方法

本研究では、ネオ・リベラリズム政策を金融化論及びレジーム論に統合するために、主として理論的、経済思想史的検討を行う。すなわち、必要な文献のサーベイと理論的、政策論的考察を主とし、ネオ・リベラリズム政策の実態を明らかにする上で必要な限りでデータを用いた実証的な分析も行う。具体的には、第一に、ネオ・リベラリズム論の文献のサーベイを行い、特に金融及び金融化との関係に関しては詳細な検討を行う。第二に、金融化論及び、金融主導型のレジーム論のサーベイを行い、特に政策がどのような役割を果たしているかという点を中心に検討する。第三に、ネオ・リベラリズム政策自体について調査し、その実態を明らかにした上で、金融化論及び金融主導型レジームにおける役割及び、その思想的な面を含めて、明確に位置付けていく。

4. 研究成果

2017年度は基本的な文献のサーベイを中心に研究を行った。第一に金融化論に関する文献の検討を行った。ポスト・ケインジアンによるものを中心に、金融化論において政策がどのような役割を果たし、どのような作用を及ぼしているかという点を検討した。第二に、マクロ経済レジーム論の検討を行った。ここでは、近年のボウイエなどによって展開されているレギュレーション理論の金融主導型レジームと認知資本主義論のレジーム論を対象にサーベイを行い、政策がどのような機能を果たし、マクロ経済連関にどのような影響を与えているかを検討した。第三に、認知資本主義論の検討を行った。認知資本主義論はネグリ、ハートの影響の下、労働の変容とIT

化が政治、社会に及ぼす影響だけでなく、経済に与える影響に関しても分析を行っている。ここでは、経済学的な分析におけるネオ・リベラリズム論への言及を中心にサーベイを行い、金融主導型レジームとネオ・リベラリズム政策の関係を考察した。第四にネオ・リベラリズム関係の文献の検討を行った。金融を重視した文献も含めてネオ・リベラリズムの概念を明らかにした上で、ネオ・リベラリズム政策の概要とその役割についてサーベイを行い、金融(化)との関係を中心に検討した。第五に、先駆的なネオ・リベラリズム研究であるフーコーの『生政治の誕生』を中心に、フーコーのネオ・リベラリズム観についての検討を行った。成果としては第一に、一般向けではあるが、「経済政策の哲学 ネオリベラリズムのフーコーによる分析 」（県民コミュニティーカレッジ、2017年10月25日、大月短期大学）という題で講演を行い、フーコーがネオ・リベラリズムをどのように捉えているかという点を検討した。第二に、ミンスキーにおける流動性選好説を検討した論文「ミンスキーと流動性選好」（『大月短大論集』第49号）を発表した。第三に、書評ではあるが、「F. J. C. de Carvalho, *Liquidity Preference and Monetary Economics*, Routledge, 2015」（2017年、『経済学史研究』第58巻第2号、pp. 37-39）を発表した。これはポスト・ケインジアン金融論にも触れている著作である。第四に、書評ではあるが、「『ポスト・ケインズ派経済学』鍋島直樹著、名古屋大学出版会、2017年」（図書新聞、第3312号、2017年7月22日）を発表した。こちらは様々な議論を行っているが金融論についても触れている著作である。第五に、一般向けではあるが、「やさしい経済学 信用としての貨幣を考える ～」（日本経済新聞、2017年10月16, 17, 18, 19, 20, 24日掲載）において、内生的貨幣供給論の解説を行った。

2018 本年度は基本的な文献のサーベイを引き続き行った。第一に金融論の政策論及び金融化の進展プロセスのサーベイを行い、金融化論の枠組におけるネオ・リベラリズム政策の位置付けを検討し、特に金融化を促進させた政策について分析を行った。第二にマクロ経済レジーム論のサーベイを行い、金融主導型レジームにおける政策の役割の特徴と問題点について検討した。ここでは金融主導型レジームの不安定性と政策の関係を中心に考察した。第三に認知資本主義論においては、フーコーの生政治論やネグリのマルチチュード論に基づいて、労働や金融についての分析を行っている。ここではネオ・リベラリズム的政策を生政治論から検討し、金融化との関係を考察した。第四にネオ・リベラリズム論の理論的構成と政策の位置付けを検討し、政策の持つ意味を分析した。また、政策の思想的背景についてもサーベイを行い、実際の政策との関係を考察した。第五にネオ・リベラリズム政策の実態とその影響に関する簡単な実証分析を行うために準備として、先進国のマクロ経済データの整理を行った。成果としては、第一に、書評ではあるが「J. Halevi, G. C. Harcourt, P. Kriesler, and J. W. Neville, *Post-Keynesian Essays from Down Under: Theory and Policy in an Historical Context* (4 vols., 2016) をめぐって」（『経済学史研究』第60巻第1号、2018年7月）においてネオ・リベラリズム政策に触れている点には検討を加えた。第二に、「貨幣の名目性:表券主義の貨幣理論」（『季刊経済理論』第55巻第4号、2019年1月）においてはネオ・リベラリズムに反対する政策としても位置付け可能な Modern Money Theory について検討した。第三に、書評ではあるが、「『金融不安定性のマクロ動学』大月書店、二宮健史郎著」（2018年、『経済セミナー』2018年10・11月号、日本評論社、p.101）を発表した。これは金融不安定性を主題としている著作である。

2019 年度は、研究の目標を達成すべく、理論的、経済思想史的な検討を中心に作業を進めた。第一に金融論におけるネオ・リベラリズム政策の位置付けを明確化し、あらためて金融化の過程の分析へと統合する試みを行った。第二にマクロ経済レジーム論に関しては金融主導型レジームをベースに、ネオ・リベラリズム政策を統合したレジームを検討した。第三に認知資本主義論については引き続き、認知資本主義論におけるネオ・リベラリズム分析に基づいて政策について検討した。また、フーコーの *Naissance de la biopolitique* (2004) の先駆的なネオ・リベラリズムの検討をもとに、経済統治の体系として、ネオ・リベラリズム政策の位置付けを試み、その基盤となる思想と政策について考察した。第四にネオ・リベラリズム政策の内容とその結果を簡単な実証分析も用いて整理した。第五にネオ・リベラリズム政策の意義とその思想的背景の検討を行った。ネオ・リベラリズム政策の金融主導型レジームにおける位置付けを基礎として、その意義を考察した。また、それを踏まえた上で、その背景となる思想及び、実際の政策とその結果との乖離についても検討し、政策思想としての意義をレトリックという観点も意識しつつ分析した。成果としては第一に「フーコーのネオ・リベラリズム分析」（『大月短大論集』第51号、2020年3月）において『生政治の誕生』を中心とするフーコーのネオ・リベラリズム分析の内容の検討を行った。第二に反緊縮的な政策論として現代貨幣理論(Modern Money Theory)に関して、学会でのコメント(「企画セッション 『現代貨幣論の検討』」、日本財政学会第76回大会、2019年)及び報告(「表券主義の貨幣理論 - マクロ経済システムと政策的論点 - 」、第9回ケインズ学会大会、2019年)を行った。第三に、やや一般向けではあるが、「内生的貨幣供給論とは何か 現代の貨幣経済を読み解く」（『表現者クライテリオン』、改題第8号(通巻86号)、2019年、pp.78-84)において、内生的貨幣供給論の解説を中心に、表券主義との関係についても説明した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 内藤敦之	4. 巻 60
2. 論文標題 J. Halevi, G. C. Harcourt, P. Kriesler, and J. W. Neville, Post-Keynesian Essays from Down Under: Theory and Policy in an Historical Context(4 vols., 2016) をめぐって	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 経済学史研究	6. 最初と最後の頁 141-147
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) https://doi.org/10.5362/jshet.60.1_141	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 内藤敦之	4. 巻 55
2. 論文標題 貨幣の名目性 : 表券主義の貨幣理論	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 季刊経済理論	6. 最初と最後の頁 18-27
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 内藤敦之	4. 巻 49
2. 論文標題 ミンスキーと流動性選好	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 大月短大論集	6. 最初と最後の頁 25-44
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 内藤敦之	4. 巻 51
2. 論文標題 フーコーのネオ・リベラリズム分析	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 大月短大論集	6. 最初と最後の頁 97-129
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 内藤敦之
2. 発表標題 貨幣の名目性：表券主義の貨幣理論
3. 学会等名 ケインズ学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 内藤敦之
2. 発表標題 表券主義の貨幣理論 - マクロ経済システムと政策的論点 -
3. 学会等名 ケインズ学会（招待講演）
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----